

『佛說大安般守意經』における 「本文」と「註」の解明(二)

——「淨」から「五根」まで*

釋果暉

法鼓佛教學院助理教授

摘要

筆者は、第三期の法鼓仏学学報において『佛說大安般守意經』『新出安般經』という両經における「安般法の六事」を中核として、順番に「数」「随」「止」「観」「還」のそれぞれの段落の内容を比較し、そして「本文」と「註」との箇所を判別した。つまり、『佛說大安般守意經』に対して『新出安般經』と対応する文、用語、あるいは意味の同じ箇所を原始的な「本文」と定義し、そしてこのような「本文」に対する解釈を「註」と見分ける。

本論では引き続き両經における「安般法の六事」の最後の部、すなわち「淨」の部分と比較することにする。その内容は、「四意止(四念処)」、「四意斷(四正勤)」、「四神足」「五根」の部分を含む。このような比較をすることによって『佛說大安般守意經』中の「本文」と「註」との箇所を分別する。残りの「五力」、「七覚意(七菩提分)」、「八行(八正道)」、「止観」「四諦」「四解依(四無碍辯)」の部分は、次の研究課題としたい。

研究の結果、『新出安般經』中の「四神足」は、煩雑かつ重複する部分

* 收稿日期: 2009/02/28, 通過審核日期: 2009/07/08。

がしばしば見られるが、『佛說大安般守意經』のそれと対応する箇所には、殆んどが省略され、かわりに理解しやすい「神通」「飛行」などの語が加えられた。また、『新出安般經』中、多くの定型句の接頭辞としての「如（應）有諦」は、『佛說大安般守意經』ではより簡略的な語の「從諦」に一変した。さらに、五根の信根の内容で難解な「隨分別可念可可」は、より容易に理解できる「信佛意喜」へと変わった。また、『佛說大安般守意經』と『新出安般經』との間には中間型『安般經』が確かに存在すると推定できる。

【目次】

- | |
|----------------------|
| 一、「淨」 |
| (一) 内外身身觀止 |
| (二) 内外痛痒痛痒觀止 |
| (三) 内外意意觀止 |
| (四) 内外法法觀止 |
| (五) 「數息品」の「淨」 |
| 二、「三十七品經」の「如有諦」 |
| (一) 「如有諦」 |
| (二) 「從諦」 |
| 三、「三十七品經」の「四意斷」「四神足」 |
| (一) 四意斷 |
| (二) 四神足 |
| 四、「三十七品經」の「五根」 |
| 五、結論 |

關鍵詞：安世高、經與註、淨、陰持入經、中間型安般經

一、「淨」

『佛説大安般守意經』と『新出安般經』における「淨」の文は、ともに四意止 *cattāro satipaṭṭhānā* を主に扱う文である。

『佛説大安般守意經』に述べている四意止とは、身意止、痛痒意止、意意止、法意止¹ であり、身觀止、痛痒觀止、意觀止、法觀止² ともさす。さらに、「身」「痛痒」「意」「法」それぞれに「内」「外」「内外」に分けて解説されることになる。例えば、「身觀止」を引き分けに出す場合なら、「内身身觀止」「外身身觀止」「内外身身觀止」のようになっている。このことに関しては、すでに安世高訳の『雜阿含二十七經』の第 14 經³ および『陰持入經』⁴ に述べられている。

『佛説大安般守意經』と『新出安般經』における「四意止」に関しては、「内」「外」を略し、「内外」のみは取り上げられている。というのは、安世高が「四意止」を手短く解釈するため、意図的に選択したわけでもあろう。しかしながら諸經論⁵ に出た「四意止」なら、ほとんどは「内」「外」「内外」に分けて論じていることになり、「内外」のみ言及される用例が見当たらない。

（一）内外身身觀止 *ajjhatabhiddhā kāye kāyānupassī viharati*

『佛説大安般守意經』における「内外身身觀止」の説明は次のように述べる。

1 CBETA, T15, no. 602, p. 171a9-14.

2 CBETA, T15, no. 602, pp. 167c15-168b5.

3 CBETA, T2, no. 101, pp. 496c14-497a1.

4 CBETA, T15, no. 603, pp. 173c29-174a1.

5 例えば、『長阿含經』（CBETA, T1, no. 1, p. 76b8-10）；『雜阿含經』（CBETA, T2, no. 99, p. 139c23-27）；『舍利弗阿毘曇論』（CBETA, T28, no. 1548, p. 616b18-20）及び『阿毘達磨大毘婆沙論』（CBETA, T27, no. 1545, p. 940a29-b1）などである。

① 何等為淨？謂諸所貪欲為不淨，除去貪欲是為淨。A 何等為五陰相？譬喻⁶ 火為陰薪為相也。② 從息至淨是皆為觀，謂：觀身，相隨，止，觀，還，淨，本為無有，內意數息，外意斷惡因緣，是為③ 二意也。③ 問何以故：不先內外觀身體，反先數息，相隨，止，觀，還，淨？報用意不淨故不見身（息）。意已淨，便悉見身內外道。④ 行⁷ 有十九行，用人有十九病故。亦有十九藥，觀身念惡露，是為止貪姪藥。念四等心，是為止瞋恚藥。自計本何因緣有，是為止愚癡藥。安般守意，是為多念藥也。⑤ 內外自觀身體：何等為身？何等為體？骨肉為身，六情合為體也。何等為六情？謂：眼合色，耳受聲，鼻向香，口欲味，細滑為身，衰意為種栽⁸ 為癡，為有生物也。⑥ 內外身體，所以重出者何？謂人貪求有大小，有前後。謂：所欲得，當分別觀。觀者，見為念。念，因見觀者，為知也。⑦ 身體⁹ （觀）止者，坐念起，起念，意不離。在所行，意所著，為識，是為身觀止也。⑧ 出息入息，念滅時：何等為念滅時？謂：念出入，氣盡時，意息滅。出息入息念滅時：譬如畫空中，無有處¹⁰。生死意，道意，俱爾也。⑨ 出息入息念滅時：亦不說：息意息¹¹。說：滅時，出息入息念滅時。物¹² 從因緣生。斷本，為滅時也。¹³

なお、註又は解釈文に関してこう記すと推定される。

6 喻＝如(金)南(金)。

7 行＝所(金)南(金)。

8 栽＝栽(金)，(南)。

9 體＝觀(金)南(金)南(金)。

10 (是)＋處(金)南(金)。

11 息＝自(金)南(金)。

12 物＝初(金)。

13 CBETA, T15, no. 602, p. 167b29-c22.

①何等為淨? 謂: 諸所貪欲為不淨, 除去貪欲是為淨。

「謂」からの文は、「淨」に対する註又は解釈文であると見做される。

『新出安般經』の「①淨爲何等」の後に「爲舍結。亦見淨」の文が並び、しかも、『佛說大安般守意經』ではこれに該当する文もうかがえる。

第六淨棄結者。¹⁴

A 何等為五陰相? 譬喻火為陰, 薪為相也。

「譬喻」からの文は、「五陰相」に対する註である。

「五陰相」について『新出安般經』では、「色盛陰」「痛痒盛陰」「思想盛陰」「生死盛陰」「識盛陰」という五つの「陰」を具体的に挙げている。

①1 從息至淨, 是皆為觀。謂: 觀身(息), 相隨, 止, 觀, 還, 淨, 本為無有。

「謂」よりの文は、「從息至淨是皆為觀」に対する註である。

文中に記載する「身相隨止觀還淨」の「身」は「息」の誤植である。

内意數息, 外意斷惡因緣。是為②二意也。

この段は、「二意」に対する註である。

③ 問何以故? 不先內外觀身體, 反先數息, 相隨, 止, 觀, 還, 淨。報: 用意不淨故。不見身意已淨, 便悉見身內外道。

これは、「不先內外觀身體, 反先數息相隨止觀還淨」という問いに対す

¹⁴ CBETA, T15, no. 602, p. 167a19.

る解釈である。

④4 行有十九行，用人有十九病故。亦有十九藥：觀身念惡露，是為止貪婬藥。念四等心，是為止瞋恚藥。自計本何因緣有，是為止愚癡藥。安般守意，是為多念藥也。

この段は、「十九行」に対する説明である。

「十九病」は『修行道地經』の「十九輩」を指している。

法師説經，觀察人情，凡十九輩。以何了知？分別塵勞，爾乃知之。何謂十九？一曰貪婬，二曰瞋恚，三曰愚癡，四曰婬怒，五曰婬癡，六曰癡恚，七曰婬怒愚癡，八曰口清意婬，九曰言柔心剛，十曰口慧心癡，十一者¹⁵ 言美而懷三毒，十二者言僂心和¹⁶，十三者惡口心剛，十四者言僂心癡，十五者口僂而懷三毒，十六者口癡心婬，十七者口癡懷怒，十八者心口俱癡，十九者口癡心懷三毒。¹⁷

④4 の「貪婬」「瞋恚」「愚癡」「多念」に関して『修行道地經』に次のように述べている。

假使行者，情欲熾盛。為説：人身不淨之法。¹⁸

修行道者，當棄瞋恚，常奉慈心。¹⁹

修行道者，設多愚癡，當觀十二因緣。²⁰

修行道者，設多想念，則為解説：出入數息。²¹

15 者＝曰。

16 和＝怒。

17 CBETA, T15, no. 606, p. 192b15-23.

18 CBETA, T15, no. 606, p. 191c17.

19 CBETA, T15, no. 606, p. 189b28.

20 CBETA, T15, no. 606, p. 192a19.

要するに、④の文は『修行道地經』から引用されるものである。

⑤ 内外自觀身體。何等為身？何等為體？骨肉為身，六情合為體也。何等為六情？謂：眼合色，耳受聲，鼻向香，口欲味，細滑為身，衰意為種栽為癡。為有生物也。

この段は、「内外自觀身體」に対する解釈である。

全部の『佛說大安般守意經』において「自觀身」という用語が14箇所あるが、「自觀身體」1箇所しかない。したがって、「身」と「體」に分けられた説明は、格義的な解釈とみられ、最初のテキストとされる『新出安般經』にも存在していない。

⑥ 内外身體，所以重出者何？謂：人貪求有大小，有前後。謂：所欲得，當分別觀。觀者見為念。念因見觀者，為知也。⑥1 身體(觀)止者：坐念起，起念，意不離。在所行，意所著，為識。是為身觀止也。

「謂」からの文は、「内外身身觀止」に対する解釈である。

「内外身(體)」に引き続き、「身觀止」を説明するものである。

大正蔵には「觀」を「體」に誤写され、⑥1「身體止」になったが、他の版にすべて「觀」と記している。

⑦ 出息入息念滅時。何等為念滅時？謂：念出入，氣盡時，意息滅。出息入息念滅時。譬如：畫空中，無有處。生死意，道意俱爾也。

⑦1 出息入息念滅時。亦不說息。意息，說滅時。出息入息念滅時。物從因緣生，斷本，為滅時也。

21 CBETA, T15, no. 606, p. 192a26.

上述した文に「出息入息念滅時」の語が二回も註釈されている。二回目の註は後に加えられたものであると思われる。二つの文は些か理解しにくい
が、㉔の「意息滅。出息入息念滅時」は「意息滅。爲出息入息念滅時」とい
う意味であり、㉔1の「滅時。出息入息念滅時」は「滅時。爲出息入息念滅
時」と解釈すれば、妥当であろう。

『新出安般經』における「身身相觀行止」は次の文である。

①淨爲何等？爲舍結²²，亦見淨。入息出息，色盛陰。入息出
息，更痛痒，痛痒盛陰。入息出息，念思想，思想盛陰。入息出
息，行作生死，生死盛陰。入息出息，因受識，識盛陰。如是受陰
想已，如是受陰想。從出受，滅意，便却生死，是不願定向活。
②内外身身觀止。若③入息出息壞時，覺是時見，即空定向活
无爲度世行。内外身身相觀止。若有入息出息，行清淨，是時見正
可，是不願定向活，无爲渡世行。内外身身相觀行止。若入息出
息，所更痛，不受想，從出，滅止意，便却生死。是不想定向活，
无爲度世行。是名爲身觀止。²³

上述した（一）「内外身身（相）觀（行）止」の文において『佛說大安
般守意經』と『新出安般經』の間には、次のような対応関係が見られる。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』
㉔何等爲淨	①淨爲何等
㉔1内外身（體）……㉔1身觀止	②内外身身觀止
㉔出息入息念滅時	③入息出息壞時

『新出安般經』では「空定向活」「不願定向活」「不想定向活」という三

²² 結＝法結㉔。

²³ ㉔TEXT, 122ff-134ff.

三昧²⁴ が述べられたが、『佛説大安般守意經』には三三昧（三活）の用語が皆目見当たらない。なぜならば、おそらく原型だった『新出安般經』²⁵ を抜粋して中間型『安般經』²⁶ を書き上げられたとき、安世高は意図的に三三昧（三活）の文を省略したからであろう。

前述した（一）の身身相觀行止の段落に限れば、『佛説大安般守意經』は『新出安般經』と深く関わっているように見える。また「十九行」の文は『修行道地經』から引用したものであると考えられる一方、「@1 從息至淨是皆為觀」「@2 二意」「@3 問何以故。不先内外觀身（體）。反先數息相隨止觀還淨」「@5 内外自觀身體」の四つの説明は最初のテキストに記載していないため、後日になって新たに加えられた文であろう。

小結

つまり、『佛説大安般守意經』における内外身身觀止の文に関しては、「@何等為淨……@内外身（體）……@1 身觀止……@出息入息念滅時」は、本文の箇所である。また、それらの本文に対して、「謂諸所貪欲為不淨。除去貪欲是為淨……所以重出者何。謂人貪求有大小有前後。謂所欲得當分別觀。觀者見為念。念因見觀者為知也。……所以重出者何。謂人貪求有大小有前後。謂所欲得當分別觀。觀者見為念。念因見觀者為知也。」は、註の箇所であると判る。また、『新出安般經』と『佛説大安般守意經』との間には、中間型『安般經』の存在の可能性が高いと指摘したい。

²⁴ 『長阿含・十報法經』、「第八三法，可作。三活向：空，不願，不想。」CBETA, T1, no. 13, p. 234a11。

²⁵ ここでは、『新出安般經』を『道安録』のいう『小安般經』に設定する。釋果暉（2008, p. 4）。

²⁶ 中間型『安般經』はすなわち中間的な『安般經』のことである。釋果暉（2008, p. 49, 58）を参照。また本論では、一の（一）、一の（四）、二のそれぞれの小結が中間型『安般經』を言及している。

（二）内外痛痒痛痒觀止 ajhattabahiddhā vedanāsu vedanānupassī viharati

『佛說大安般守意經』における「内外痛痒痛痒見觀止」の文は次のごとくである。

㊦内外痛痒，見觀者：為見痛痒所從起，便觀，是為見觀也。内外痛痒者。謂：外好物為外痒，外惡物為外痛。内可意為内²⁷痒，内不可意為内痛。在内，為内法。在外²⁸因緣，為外法。亦謂：目為内，色為外。耳為内，聲為外。鼻為内，香為外。口為内，味為外。心為内，念為外。見好細滑意，欲得是為痒。見麤惡，意不用是為痛，俱墮罪也。㊦1痛痒觀止者。若人臂²⁹痛，意不作痛。反念，他一切身痛如是，以意不在痛，為止。痛亦可念，亦不可³⁰念，念痛無所著。自愛身，當觀他人身。意愛他人身，當自觀身，亦為止也。

B 内外痛痒，所以重出者何？謂：人見³¹色，愛有薄厚。其³²意不等。觀：多與少異故，重分別觀。道，當内觀有癡，當外觀以自證也。身心痛痒，各自異。得寒熱，刀杖³³痛極，是為身痛。得美飯，載車，好衣，身諸所便，是為身痒。心痛者：身自憂，復憂他人及萬事，是為心痛。心得所好，及諸歡喜，是為心痒也。³⁴

27 内=痛(罽)(罽)。

28 外=外外(罽)。

29 [臂]—(罽)(罽)(罽)。

30 不可=可不(罽)(罽)(罽)。

31 見=俱。

32 薄厚其=其薄厚(罽)。

33 杖=林。

34 CBETA, T15, no. 602, pp. 167c22-168a11.

まず、最初の段落を分析してみよう。

㊦内外痛痒見觀者。為見痛痒所從起，便觀，是為見觀也。内外痛痒者。謂：外好物為外痒，外惡物為外痛。内可意為内痒，内不可意為内痛。在内，為内法。在外因緣，為外法。亦謂：目為内，色為外。耳為内，聲為外。鼻為内，香為外。口為内，味為外。心為内，念為外。見好細滑意，欲得是為痒。見龜惡，意不用是為痛，俱墮罪也。

この段落は「内外痛痒見觀者」の記述であり、「見觀」と「内外痛痒」について註釈するものでもある。「内外痛痒見觀」の語は「内外痛痒痛痒見觀止」から略されたものである。

「見觀」は *anupassī*、「痛痒」は *vedanā*、「内外」は *ajjhatabhiddhā* に当てはまっているが、「内外痛痒」を外痒、外痛、内痒、内痛に分けること自体は格義的な解釈であると見なされる。

㊦1 痛痒觀止者。若人臂痛，意不作痛。反念，他一切身痛如是，以意不在痛，為止。痛亦可念，亦不可念，念痛無所著。自愛身，當觀他人身。意愛他人身，當自觀身，亦為止也。

「痛痒觀止」に対する註である。

B 内外痛痒，所以重出者何？謂：人見色，愛有薄厚。其意不等。觀：多與少異故，重分別觀。道，當内觀有癡，當外觀以自證也。身心痛痒，各自異。得寒熱，刀杖痛極，是為身痛。得美飯，載車，好衣，身諸所便，是為身痒。心痛者，身自憂，復憂他人及萬事，是為心痛。心得所好，及諸歡喜，是為心痒也。

「内外痛痒」を説明する解釈である。

「重出」とは「内」観および「外」観を重ねて出ることである。

身痛、身痒、心痛、心痒の解釈は格義的な解釈である。

「B 内外痛痒」＋「㉑1 痛痒觀止」→「内外痛痒痛痒觀止」のように、「内外痛痒痛痒觀止」は元来、一つの用語であり、ここでは「内外痛痒」と「痛痒觀止」に分け、それぞれ解釈されると思われる。

『新出安般經』における「内外痛痒痛痒（相）觀（行）止」は次の文である。

④内外痛痒痛痒相觀行止。若入息出息復壞，從痛痒暁正見，是空定向活，无爲度世行。内外痛痒痛痒見行止。若有入息出息，因痛滅，可觀見，是不思想定向活，无爲度世行。内外痛痒痛痒相觀行止。若有一時入息出息，因識知受想行，出滅受想，便意離却世間，是不願定向活，无爲度世行。³⁵

『佛說大安般守意經』と『新出安般經』における§7.2 内外痛痒痛痒觀止について纏めてみると、それらに該当する箇所を次のように示す。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』
B 内外痛痒」＋「㉑1 痛痒觀止	内外痛痒痛痒觀止
㉑内外痛痒見觀	④内外痛痒痛痒相觀（行）止

『新出安般經』に出る「相觀」及び「見觀」は anupassī から訳された同義語である。というのは、『佛說大安般守意經』の「内外痛痒」「痛痒觀止」「内外痛痒見觀」の用語は『新出安般經』の「内外痛痒痛痒相觀（行）止」から分化された語であるから。

35 安TEXT, 135ff-141ff.

小結

つまり、『佛說大安般守意經』の「B 内外痛痒」「㉑1 痛痒觀止」「㉑ 内外痛痒見觀」は、本文の箇所である。

そして、それらの本文の箇所に対して、「所以重出者何？謂：人見色，愛有薄厚，其意不等。觀：多與少異故。重分別觀。道，當内觀有癡，當外觀以自證也。……」「若人臂痛，意不作痛。反念，他一切身痛如是。以意不在痛為止。痛，亦可念，亦不可念，念痛無所著。自愛身，當觀他人身。意愛他人身，當自觀身，亦為止也。」「為見痛痒所從起，便觀，是為見觀也。内外痛痒者。謂：外好物，為外痒。外惡物，為外痛。内可意，為内痒，内不可意，為内痛。在内，為内法。在外因縁，為外法。」は、註の箇所である。と判る。

（三）内外意意觀止 ajjhatabahiddhā citte cittānupassī viharati

『佛說大安般守意經』における「内外意意相觀止」は次の文である。

㉑意（意）相觀者，有兩因縁。在内，斷惡，念道。一者，謂：五樂六衰，當制斷之。觀者，自觀身。身，不知龜細。以得乃覺，是為意意相觀。㉑1 意意相觀。息亦是意，數亦是意。數時，觀³⁶息，為意意相觀也。㉑意³⁷ 觀止者。欲婬，制不為。欲瞋恚，制不怒。欲癡，制不作。欲貪，制不求。諸惡事，一切不向。是為觀止。亦謂：以知三十七品經，常念不離，為止也。㉑出息入息盡定，便觀者。盡謂：罪盡。定謂：息止意定。觀者謂：觀³⁸ 止還淨也。盡止者，謂我能說³⁹ 是，曉是，遍更是。是為盡止也。所

36 觀＝視(觀)南(注)。

37 〔意〕一(金)。

38 〔觀〕一(金)。

39 說＋〔是更見〕(金)(觀)(南)(注)。

起息，若布施作福一切善法。*已起便滅，更意念耶⁴⁰？向習罪行亦無數，古⁴¹世⁴²今世，意不如是相隨，他人亦爾。*已知覺，當斷。*已斷，為㊦1 内外意意觀止也。⁴³

㊥意（意）相觀者，有兩因緣。在內，斷惡，念道。一者，謂：五樂六衰，當制斷之。觀者，自觀身。身，不知龜細。以得乃覺，是為意意相觀。

㊦1 意意相觀。息亦是意，數亦是意。數時，觀息，為意意相觀也。

「意意相觀」は二回にわたり註釈され、しかも、㊥「意相觀」は前後の文脈からみると、「意」字が脱落していると判明された。すなわち「意意相觀」と訂正すべきである。

㊦意觀止者。欲婬，制不為。欲瞋恚，制不怒。欲癡，制不作。欲貪，制不求。諸惡事，一切不向。是為觀止。亦謂：以知三十七品經，常念不離，為止也。

この段は「意觀止」に対する註釈である。

㊧出息入息盡定，便觀者。盡謂：罪盡。定謂：息止意定。觀者謂：觀止還淨也。

40 耶=邪(𠄎)(南)(俗)。

41 古=故(金)(𠄎)(南)(俗)。

42 世=更(南)(俗)。

43 CBETA, T15, no. 602, p. 168a11-a24.

㊸1 盡止者，謂：我能說是，曉是，遍更是，是為盡止也。

「㊸出息入息盡定便觀者」は『新出安般經』の「㊷若入息出息有從是寤盡滅可正見」に類似している上で、「可正見」→「便觀」は変化形とも見なせる。

『新出安般經』には㊸の「盡定」の語が出ていないが、空定、不思想定、不願定という三つの定がみられる。おそらく、安世高は難解な三つの定（三昧）を簡略化して、「定」のみを敷衍したに違いない。「觀止還淨」の意は「還淨」を「觀止」するとも理解される。⁴⁴

㊸1「盡止」の語は、たぶん『新出安般經』の「盡滅」に該当する語であろうとも考えられる。

後述の（四）の「㊹出息入息覺盡止」に現われた「盡止」の語に「謂覺出入息欲報時為盡。亦計萬物身生復滅。」という文が続いてきたため、改めて㊹「盡止」と㊸1「盡止」との定義を照合してみたら、両者の間にかみ合わない箇所が歴然としている。

また『陰持入經』では「盡止」の用語も見出される上で、PSSB の調べによれば、「盡止」「已盡」の原語は「nirodha」である。㊹「盡止」とはほぼ同意味であるほかに、㊸1「盡止」の解釈文はもう一つの意味も持っている。

『陰持入經』「彼以有是陰。亦持，亦入。已盡止寂然。從後無陰，亦持，亦入。無相連，不復起。是為無餘。」⁴⁵

Tattha so imesaṃ khandhānaṃ dhātu-āyatanānaṃ nirodho vūpasamo aññesañca khandhadhātu-āyatanānaṃ appaṭisandhi apātubhāvo.⁴⁶

44 『修行道地經』「數息品」には、「從初數息至後究竟悉當觀察」（CBETA, T15, no. 606, p. 216b13-14）と「其修行者已成於觀。當復還淨」（p. 216b17）との文があるから、安世高はこの二つの文を参照したとみられる。また、この「觀止」の「止」は、「六事」中の止ではなく、viharati に該当する「止」であると見られる。

45 CBETA, T15, no. 603, p. 176b21-23.

『陰持入經』「彼以為是陰，持，入。已盡寂然。不有陰，持，入。不相連，不復發，是名為已畢無為。」⁴⁷

Yo imassa dukkhassa nirodho vūpasamo, aññassa ca apātubhāvo, ayaṃ anupādisesā nibbānadhātu. ⁴⁸

㊦1 盡止者，謂：我能說是，曉是，遍更是，是為盡止也。

㊦1 は「内外意相觀止」について論ずる文である。

「我能說是更見是曉是遍更是」を推敲してみると、我は能くこれを説き、更にこれを見、これを曉め、遍くこれを更ると理解される。「尽止」の「尽（ことごとく）」の意味は、「遍（あまねく）」と類通するとされる。「更（へる）」とは、経験するという意味を持ち、「受ける」すなわち「観る」とも解けられる。⁴⁹

また、安世高の訳經にはおおく「說是」の語がある。「數息品」の「十六特勝」中、それぞれ「特勝」には「即知」あるいは「則知」の語があり、さらに同品中、「曉安則為六」⁵⁰の文もあり、「曉」は「知」の意味と推定される。「遍更是」に関して、「數息品」中、「歡悅如是所更樂」⁵¹の文があり、安世高は「觸」を「更」に訳したおおくの例がある。

所起息，若布施，作福，一切善法，已起，便滅，更意念耶？向習罪行，亦無數。古世今世，意不如是相隨，他人亦爾。已知覺，當斷。已斷，為㊦1内外意相觀止也。

46 Peṭakopadesa, p. 124, 14ff-16ff.

47 CBETA, T15, no. 603, p. 180a8-9.

48 Peṭakopadesa, p. 136, 1ff-3ff.

49 漢語の更は受の意があるから、また『新安般經』には、「受想」の語は、「観 contemplating」としての意があると見出される。(Hung, 2008) “The Textual Formation of the Newly Discovered *An Ban Shou Yi Jing*.”

50 CBETA, T15, no. 606, p. 216a23.

51 CBETA, T15, no. 606, p. 216a22.

この段は「内外意意觀止」に対する註釈の一部であると見られる。

『新出安般經』における「内外意意相觀止」は次のように述べている。

⑥内外意意見觀止。若入息出息，有壞時，更已，寤正見，是空定同活，⁵² 无爲度世行。内外意意見行止。⑦若入息出息，有從是寤盡滅，可正見，是不思想定活向，无爲度世行。内外意意相觀見行止。若有入息出息，知入息出息，寤已，受思想行，出受滅意，却生死，是不願定活向，无爲度世行。⁵³

「内外意意相觀止」の段落において、『佛説大安般守意經』および『新出安般經』の対応関係を次のように示す。

『佛説大安般守意經』	『新出安般經』
㊸意（意）相觀＋㊹意觀止（＝㊹1内外意意觀止）	⑥内外意意見（相）觀止
㊺出息入息盡定便觀者＋㊻1盡止	⑦若入息出息有從是寤盡滅可正見

『佛説大安般守意經』の「意意相觀」「意觀止」「内外意意觀止」の用語は『新出安般經』の「内外意意見（相）觀止」から分化されてきたものであると考えられる。また、㊺「盡定（止）」と⑦「盡滅」、㊻「便觀」「觀止還淨」と⑦「可正見」という語義的な対応関係もほぼ合致している。

小結

つまり、『佛説大安般守意經』の「㊸意（意）相觀」「㊹意觀止」「㊹1内外意意觀止」は、本文の箇所である。そして、それらの本文に対して、「有兩因縁。在內，斷惡念道。一者，謂：五樂六衰，當制斷之。觀者，自觀

⁵² 同活は向活にするべき、因TEXT, 129ffに「空定向活」の語があるから。

⁵³ 因TEXT, 142ff-148ff.

身，身不知麤細，以得乃覺，是為意意相觀。」「欲姪，制不為。欲瞋恚，制不怒。欲癡，制不作。欲貪，制不求。諸惡事，一切不向，是為觀止。亦謂：以知三十七品經，常念不離，為止也。」「盡謂：罪盡。定謂：息止意定。觀者謂：觀止還淨也。」「我能說是，曉是，遍更是，是為盡止也。」は、註の箇所である。

（四）内外法法觀止 ajjhatabhiddhā dhammesu dhammānupassī viharati

『佛說大安般守意經』における「内外法法觀止」は次の文である。

㊦内外法法者。内法謂：身，外法謂：他人。有持戒法，有不持戒法，是為内外法法⁵⁴也。内法謂：行點，不離三十七品經，一切餘事，意不*墮中，行道得道，是為内法。外法謂：*墮生死。謂⁵⁵生死行。便得生死，不脫。一切當斷，已斷，為㊦1 内外法（法）觀止也。法觀止者。一切人，皆自身為身，諦校計，非我身。何以故？有眼有色，眼亦非身，色亦非身。何以故？人*已死，有眼，無所見。亦有色，無所應。身如是，但有識，亦非身。何以故？識無有形，亦無所輕止。如是計，眼，耳，鼻，舌⁵⁶，身，意亦爾。得是計，為法觀止。亦謂：不念惡，為止。念惡為不止。何以故？意行故也。⁵⁷

㊦ 出息入息，自覺。出息入息，自知。當時為覺，以後為知。覺者謂：覺息長短。知者謂：知息生滅，麤細，遲疾也。㊦ 出息入息覺

54 [法] 一(罽)南(經)。

55 謂=隨(罽)南(經)。

56 舌=口(金)罽(南)經。

57 CBETA, T15, no. 602, p. 168a24-b7.

盡止⁵⁸ 者。謂：覺出⁵⁹ 入息，欲報時，為盡。亦計，萬物身生復滅。心⁶⁰ 者謂：意*止也。㊦見觀空者。行道得觀，不復見身。㊦1 便墮空無所有者。謂：意無所著，意有所著，因為有。◎斷六入，便得賢明。賢謂：身。明謂：道也。①知出何所，滅何所者。譬如，念石，出石入木，石便滅，五陰亦爾。出色，入痛痒⁶¹，出痛痒，入思想。出思想，入生死。出生死，入識。已分別是，乃墮⁶² 三十七品經⁶³ 也。⁶⁴

問⁶⁵：何等為㊦思惟無為道？報：思為校計，惟為聽，無謂不念萬物。為者，如說行道，為得故。言思惟無為道也。思為念，惟為分別白黑。黑為生死，白為道。道，無所有已，分別無所有，便無所為故。言：思惟無為道。若計有所為，所著，為非思惟。思亦為物，惟為解意。解意，便知十二因緣事。亦謂思為念，惟為計也。⁶⁶

持戒法，是為内外法法也。内法謂：行黠，不離三十七品經。一切餘事，意不墮中，行道得道，是為内法。外法謂：墮生死，謂生死行，便得生死，不脫。

この最初の段は「内外法法」に対する註釈であり。「意不墮中」⁶⁷ は

58 止=心㊦㊦㊦*。

59 [出] 一㊦。

60 心=止㊦。

61 痒=癢㊦㊦㊦。下同。

62 墮=隨㊦㊦㊦。下同。

63 經=結㊦㊦㊦。

64 CBETA, T15, no. 602, p. 168b14-24.

65 問+ (曰) ㊦㊦㊦。

66 CBETA, T15, no. 602, p. 168b25-c2.

67 『佛說十二門經』㊦Text, p. 195, line314.

「行道得道」⁶⁸ とともに安世高の用語であると見られる。

一切當斷，已斷，為⑥1 内外法（法）觀止也。⑥2 法觀止者，一切人皆自身為身。諦校計非我身，何以故？有眼有色。眼亦非身，色亦非身。何以故？人已死，有眼無所見。亦有色，無所應。身如是，但有識亦非身，何以故？識無有形，亦無所輕止。如是計眼，耳，鼻，舌，身，意亦爾，得是計，為法觀止。亦謂，不念惡為止。念惡，為不止。何以故？意行故也。

上述した段は「一切當斷已斷。為内外法（法）觀止」の解釈である。

⑥「内外法法」の用語が使われているからみると、「内外法觀止」は「内外法法觀止」に該当する。

①出息入息自覺，出息入息自知。當時為覺，以後為知。覺者謂：覺息長短。知者謂：知息生滅，麤細，遲疾也。

「①出息入息自覺，出息入息自知。」に関する釈義である。

『新出安般經』には「⑨覺知」の語があるため、恐らく、「覺知」→「（自）覺」「（自）知」という変化形になったように思われる。

①出息入息，覺盡止者。謂：覺出入息，欲報時為盡。亦計萬物身，生復滅。心（止）者謂：意止也。

①「出息入息覺盡止」は『新出安般經』の「⑩入息出息壞」に合致しているために、『佛說大安般守意經』の「①出息入息自覺。出息入息自知。」は「①出息入息覺盡止者」とともに、『新出安般經』の「①入息出息壞①覺」

⁶⁸ 『阿毘曇五法行經』「行道得道」（CBETA, T28, no. 1557, p. 998a21），『佛說十二門經』Text, p. 195, line308, 310。

「知入息出息」の文に由来したと判ずる。

高麗藏では「心者謂意止也」の「心」が「止」となって、「止」は「尽止」の「止」に解釈される。文脈からみると、高麗藏の校訂に準ずべしとも考えられる。

㊦ 見觀空者。行道得觀，不復見身。

「見觀空」に対する註釈で、『新出安般經』の「㊦正見是空(定)」と対応している。

㊦1 便墮空無所有者。謂：意無所著。意有所著，因為有。

「空無所有」に対する註釈で、「見觀空」の延長線上の文でもある。この「空無所有」は恐らく『佛說十二門經』⁶⁹からの引用であると思われる。

◎斷六入，便得賢明。賢謂：身。明謂：道也。

「斷六入便得賢明」に対する註釈であるが、『新出安般經』には見当たらない。

① 知出何所，滅何所者。譬如：念石，出石入木，石便滅。五陰亦爾，出色，入痛痒。出痛痒，入思想。出思想，入生死。出生死，入識。已分別是，乃墮三十七品經也。

「知出何所滅何所」に対する註釈で、『新出安般經』の「①若入息出息知入息出息行寤知滅」と対応している。

⁶⁹ 「第九門爲何等？萬物已見。本未來時爲空无所有。已无所有。便爲空。」『佛說十二門經』 卍Text, p. 196, line330-331。

問：何等為⑩思惟無為道？報：思為校計，惟為聽，無謂不念萬物。為者：如說行道，為得故，言思惟無為道也。思為念，惟為分別白黑。黑為生死，白為道。道無所有，已分別無所有，便無所為故，言思惟無為道。若計有所為，所著，為非思惟。思亦為物，惟為解意。解意，便知十二因緣事。亦謂思為念，惟為計也。

「思惟無為道」について説明する註釈で、『新出安般經』の「⑩无爲度世行」に当たっている。「思惟無為道」においては、「思」「惟」「無」「為」「道」を一字一字に分けて解釈した表現からみると、典型的な格義的解釈法であると断定できる。

『新出安般經』における「内外法法觀止」は下のよう表れている。

⑧内外法法觀見。若一時，入息出息壞，覺知入息出息，寤已，受思想行，出受滅意，却生死，是不願定活向，无爲度世行。内外法法觀見。若一時，⑩入息出息壞，⑨覺知入息出息，更寤⑪正見，是空定活向，无爲度世行。内外法法見行止。⑫若入息出息，知入息出息行，寤知滅，見可。是不願定活向⑬，无爲度世行。内外法法見行止。如是四意事。如是增守，不離多作。是爲四意止。⁷⁰

「内外法法觀止」の段落において、『佛說大安般守意經』および『新出安般經』に該当する箇所を次に示す。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』
⑩1 内外法（法）觀止（=⑩内外法法+⑩2 法觀止）	⑧内外法法觀見（内外法法見觀止）
①出息入息自覺，出息入息自知	⑨覺知入息出息
①出息入息覺盡止	⑩入息出息壞

⁷⁰ 安TEXT149ff-158ff.

㊦見觀空者	㊦正見是空（定活向）
①知出何所，滅何所	②若入息出息，知入息出息行，寤知滅
㊦思惟無為道	③无爲度世行

「内外法法觀止」に「㊦斷六入便得賢明」の文があるが、『新出安般經』には出ていないし、（一）の「内外身身相觀止」に「㊦1 從息至淨是皆為觀」「㊦2 二意」などの文も見当たらないため、『佛説大安般守意經』と『新出安般經』との間には、中間型『安般經』が存在しているはずであるとも指摘したい。

なお、『新出安般經』では「内外身身相觀止」「内外痛痒痛痒相觀止」「内外意意相觀止」「内外法法相觀止」はそれぞれ「空定向活」「不願定向活」「不想定向活」という三三昧を基に解説されているが、『佛説大安般守意經』には三三昧（三活）という用語はまったく見当たらない。というのは、『新出安般經』（=『小安般經』）を抜粋してきたものをもとに、中間型『安般經』へと敷衍していく際、安世高は意識的に三三昧（三活）の文を省略したのであろう。

前述したように、『佛説大安般守意經』と『新出安般經』における「四意止」の「内」「外」をわざと省略し、「内外」のみ取り上げられる上で、『新出安般經』から中間型『安般經』へと敷衍していくとき、三三昧は省略されたという蓋然性が極めて高いであろう。

小結

つまり、『佛説大安般守意經』の「㊦1 内外法（法）觀止」「①出息入息自覺。出息入息自知」、「①出息入息覺盡止」「㊦見觀空者」「①知出何所。滅何所」「㊦思惟無為道」は、本文の箇所である。そしてそれらの本文の箇所に対して、「内法謂：行黠，不離三十七品經。一切餘事，意不墮中，行道得道，是為内法。外法謂：墮生死。謂生死行，便得生死不脫。」「當時為覺，以後為知。覺者謂：覺息長短。知者謂：知息生滅，僣細，遲疾也。」

「行道得觀，不復見身。」「譬如：念石，出石入木，石便滅。五陰亦爾，出色，入痛痒。出痛痒，入思想。出思想，入生死。出生死，入識……」「報：思為校計：惟為聽：無謂不念萬物。為者：如說行道，為得故。言思惟無為道也」は、註の箇所である。なお、『佛說大安般守意經』と『新出安般經』との間には、中間型『安般經』があると推定する。

（五）「數息品」の「淨」

「數息品」における「淨」の文は後述した文である。

其修行者當知了之，色起滅處，痛、痒、法、意。觀起滅本，察其因緣過去、當來；行無願定，隨入脫門察生死苦；計斯五陰即是憂患，無有狐疑。爾時則獲解苦法忍。已見苦本，便見慧眼，除于十結。何謂為十：一曰貪身，二曰見神，三曰邪見，四曰猶豫，五曰失戒，六曰狐疑，七曰愛欲，八曰瞋恚，九曰貢高，十曰愚癡。棄是十結已獲此心，則向無漏入於正見，度凡夫地住于聖道，不犯地獄、畜生、餓鬼之罪，終不橫死，會成道跡，無願三昧⁷¹而行正受，*已向脫門。⁷²

「數息品」で「淨」を論ずる文はかなり簡略であるし、『新出安般經』、『佛說大安般守意經』の説明とも違っている一方、「四意止」の「身」「痛痒」「意」「法」についての解義は見当たらない。

文中に「色起滅處痛痒法意」という「四意止」および「五陰」が言及されていることからみると、「數息品」の「淨」は『新出安般經』、『佛說大安般守意經』とおおむね類似していると考えられる。

また、「數息品」に三三昧に属する「無願三昧」が出ている上で、同品

71 三昧＝三時。

72 CBETA, T15, no. 606, p. 218a7-17.

は『新出安般經』⁷³ との間に深い関わりをもっているに相違ない。

二、「三十七品經」の「如有諦」

「如有諦」および「從諦」について

『新出安般經』の「三十七品經」に五根から八種道⁷⁴、四解依⁷⁵についての説明が述べている。その中には、「彼如有諦」、「彼如應有諦」という定型の文がうかがえるし、「彼如有諦」の文は 17 箇所、「彼如應有諦」は 10 箇所、合計 27 箇所という文が出てくる。一方、『佛説大安般守意經』に出る五根から八種道⁷⁶、および四解依⁷⁷の文には、「從諦」の文は 24 箇所みられる。

『新出安般經』の「彼如（應）有諦……」と対応したように、『佛説大安般守意經』に出る「從諦……」という定型文がたいぶ整っている。「彼如應有諦」の「彼」は代名詞である。「如有諦」「從諦」という両者のかかわりについて、改めてここで論究することにする。

（一）「如有諦」

「如應有諦」は *yathābhūtaṃ* から訳された用語であるとデレアヌ フロリン（2004）は「新発見の安世高訳『安般守意經』金剛寺本」の論文⁷⁸の中で既に言及した。しかし現存する安世高訳經は原本と見なされたパーリ文とを対照してみると、「如（應）有諦」が *yathābhūtaṃ* と対応しているという関係はほとんど見付からない。

73 『新出安般經』『佛説解十二門經』では「不願（定）」の語が使われている。

74 『安般守意經』安TEXT, p. 191-192, line 185-216。

75 『安般守意經』安TEXT, p. 192-193, line 230-240。

76 CBETA, T15, no. 602, p. 170b25-c17。

77 CBETA, T15, no. 602, p. 169a9-15。

78 氏（2004, p. 36）。

筆者の私見では、「如應有諦」の「如（應）有」のみが *yathābhūtaṃ* の訳語であるし、「諦」とは具体的に四諦の「諦」を指すと思う。つまり、「諦」は *sacca* から訳されたことを指摘したい。その理由は次の通りである。

<理由 1> 安世高の手掛けた訳經のなかでは、『佛說大安般守意經』に最も近いものは、『陰持入經』である。『陰持入經』の原本と見なされる PSSB によれば、*yathābhūtaṃ* を「如有」と訳される。殊更 PSSB のなかに出た *yathābhūtaṃ*（または *yathābhūta*）の用語が九箇所にあつし、その中の七箇所は如有（または如有如有）と訳されている。

PSSB	安世高訳語
<u><i>yathābhūtaṃ</i></u> appajānanalakkhaṇā ⁷⁹	如有不解 (T15, p. 175a3)
<u><i>yathābhūtaṃ</i></u> vicayo pavicayo ⁸⁰	如有分別 (T15, p. 176a15)
catūsu ariyasaccesu <u><i>yathābhūtaṃ</i></u> ⁸¹	四諦如有如有 (T15, p. 176c9-10)
<u><i>Yathābhūta</i></u> dassanan ti ⁸²	如是望 (T15, p. 179a6)
so <u><i>yathābhūtaṃ</i></u> pajānitvā nibbindati ⁸³	彼如有如有知是為惡却離 (T15, p. 178a9)
Tattha yo <u><i>yathābhūtaṃ</i></u> pajānāti ⁸⁴	彼若如有知智 (T15, p. 178a7-8)
<u><i>yathābhūta</i></u> ñāṇadassanassa padaṭṭhānaṃ ⁸⁵	令致如有慧處 (T15, p. 178a3)

「如有」に訳されていない残りの二箇所の *yathābhūtaṃ*⁸⁶ は次のように記している。

79 Peṭakopadesa, p. 117, 13ff.

80 Peṭakopadesa, p. 122, 20ff-21ff.

81 Peṭakopadesa, p. 125, 13ff.

82 Peṭakopadesa, p. 132, 23ff.

83 Peṭakopadesa, p. 130, 12ff.

84 Peṭakopadesa, p. 130, 11ff.

85 Peṭakopadesa, p. 130, 4ff.

86 ①の例には *yathābhūtaṃ* が訳されていないが、②の例は、寂然に訳する。

① Tattha avijjā nāma catūsu ariyasaccesu yathābhūtaṃ
aññāṇaṃ⁸⁷

彼癡，名為不解四諦，不慧。⁸⁸

② Sabbadhammaṃ yathābhūtaṃ paṭivedhalakkhaṇā vipassanā⁸⁹

彼從一切法，寂然能得解受，是為觀想。⁹⁰

要するに、安世高は yathābhūtaṃ を「如有」と訳したと結論づけるのは、妥当であろう。

<理由 2> 『阿毘達磨大毘婆沙論』は「菩提分法」または「四聖諦」となんらかの関わりを持っているように思われる。その理由は次に述べてみよう。

菩提分法，名有三十七。……問：何故名為菩提分法？菩提分法是何義耶？答：盡無生智，說名菩提。已究竟覺四聖諦故。若法隨順此究竟覺，勢用増上，此中說為菩提分法。⁹¹

上に述べた文からみると、三十七菩提の各分法は、四聖諦を悟ることに従って修習するために、それなりの名称が付けられる。いわば、「如（應）有諦」の「諦」は四聖諦の「諦」を指し示す。また、「從諦」は「諦にしたがう」という意味で、「諦」は四聖諦の「諦」に該当する。

<理由 3> 「四諦」または「三十七道品法」との関わりについて、『修行道地經』の「數息品」は、次のように述べる。

具足此三十七⁹² 法，便解知苦……⁹³

⁸⁷ Peṭakopadesa, p. 118, 22ff.

⁸⁸ CBETA, T15, no. 603, p. 175b3-4.

⁸⁹ Peṭakopadesa, p. 127, 19ff.

⁹⁰ CBETA, T15, no. 603, p. 177a27.

⁹¹ CBETA, T27, no. 1545, p. 496b13-21.

上述したとおりに四諦を悟るため、三十七道品法を修習しなければならないとされる。

<理由 4> yathā に関して、『新出安般經』にすでに「如有」の用語が用いられる上で、『佛說大安般守意經』では「如」と訳された。

前述したように、この「如有」の原語は yathābhūtaṃ であるから、「如有諦」の「諦」は「如有」以外の意味を持っていると考えられる。

彼如有可遍諦。是名爲思惟。所起念一心。是名爲定。彼如有常斷。若欲、若信、若精進、若念、若定、若慧。是名爲斷生死。故曰念定、斷生死苦、隨行成神足滿。⁹⁴

（二）「從諦」

上に述べたとおり、『新出安般經』に「彼如（應）有諦……」の定型文が出ているのに対し、『佛說大安般守意經』には「從諦……」の定型文が使われている。「從諦」の「諦」とは、「四諦」の「諦」を意味し、同經では次の用例がみられる。

從諦謂四諦。⁹⁵

次に、「從諦」の「從」を PSSB の視点から再検討してみよう。

『陰持入經』の「從」の訳語を考察してみると、おおかた文法上の格（Case）の役割を担っている一方、具格（Instrumental）、目的格（Accusative）、与格（Dative）及び依格（Locative）という役目も受け持つ

⁹² 七+（品）㊦㊧。

⁹³ CBETA, T15, no. 606, p. 218b14.

⁹⁴ 安TEXT, 178-181ff.

⁹⁵ CBETA, T15, no. 602, p. 169a15.

ている。その例を次に挙げてみよう。

adosena dosaṃ samugghātetī (具格) 96

彼從不貪為捨貪。97

sukhadukkhaṃ vitikkamanti (目的格) 98

從苦樂得却離。99

aniccasaññā viññāṇakkhandhassa pariññattaṃ (与格) 100

彼非常想，令識陰從是解。101

ayaṃ assā nissando (与格) 102

是為從是要致。103

vā kusalākusalesu vā dhammesu (依格) 104

了從善惡從是法生。105

具格、目的格として使われる場合なら、その後に関連する動詞が付いてくるはずである。でも、『佛説大安般守意經』の「從諦……」という定型文にある「從諦」の直後に付いた語は、関連する動詞ではないため、「從諦」の「從」は「与格」の役割を表すとみられる。つまり、「從諦」の原語は *saccassa* であり、「諦のために」「諦にしたがう」という意味でもある。106

96 Peṭakopadesa, p. 127, 13ff.

97 CBETA, T15, no. 603, p. 177a18.

98 Peṭakopadesa, p. 133, 4ff.

99 CBETA, T15, no. 603, p. 179a13.

100 Peṭakopadesa, p. 127, 11ff.

101 CBETA, T15, no. 603, p. 177a16.

102 Peṭakopadesa, p. 126, 9ff-10ff.

103 CBETA, T15, no. 603, p. 177a11-12.

104 Peṭakopadesa, p. 122, 19ff.

105 CBETA, T15, no. 603, p. 176a14.

106 宇井伯壽 (1983, p. 226, 232) は「從諦」を「諦より」と「諦に從う」に訳している。

「從諦」の語は『新出安般經』にも出ている。

彼如有諦，從諦足喜。是名爲喜覺種意。¹⁰⁷

小結

『新出安般經』の「如有諦」と『佛說大安般守意經』の「從諦」について調べてみたら、安世高がおおかた *yathābhūtaṃ* を「如有」に訳していることは明かされた。「如有諦」および「從諦」の「諦」は、具体的に「四諦」の「諦 *sacca*」を意味している。

また、「如（應）有諦」と「從諦」との両者の関わりをさぐってみたら、『新出安般經』から中間型『安般經』へと、さらに中間型『安般經』から『佛說大安般守意經』へと敷衍していくとき、「如有 *yathābhūtaṃ*」の語がついに省略されたと考えては良かろう。

三、「三十七品經」の「四意斷」「四神足」

「數息品」と同様に、『新出安般經』の「四意止」と「止觀・四諦」の間に四意斷（四斷意）→四神足→五根→五力→七覺意→八種道（八行）という「三十七品經」¹⁰⁸ *sattatiṃsa bodhipakkhikā dhammā* の文が挟まれている。

一方、『佛說大安般守意經』の「淨」に述べてある「四意止」の文に「四神足」¹⁰⁹ が挟まれ、そして引き続き「止觀・四諦」の文が付いてきた。

¹⁰⁷ 〔安〕TEXT, 205ff.

¹⁰⁸ 「三十七品經」の語は、安世高の独特な訳語である。また、『佛說大安般守意經』に一箇所と『陰持入經』に二箇所が「三十七品經法」の語がみられ、PSSB から *sattatiṃsa bodhipakkhikā dhammā* の原語が見出される。したがって同訳語中の「經」「經法」は、ともに「*dhammā*」の訳語であることが判る。Zacchetti (2004a) を参照されたい。

¹⁰⁹ CBETA, T15, no. 602, p. 168c2-16.

なお『佛説大安般守意經』卷下には「三十七品應斂……如是佛弟子八行」¹¹⁰ という「三十七品」の文が記している。特に「卷下」の冒頭に述べる「㊦四意止」「㊦四意念斷」「㊦四神足」の文は、『新出安般經』の記述に該当していないということからみると、もともと「三十七品」に属するものでなく、後日になって再び加えられた解釈であると思われる。

三十七品應斂¹¹¹。㊦設自觀身，觀他人身，止姪。不亂意，止餘意。自觀痛痒，觀他人痛痒，止瞋恚。自觀意，觀他人意，止癡。自觀法，觀他人法，得道，是名為四意止也。㊦避身為避色，避痛痒為避五樂，避意為避念，避法，不墮願業治生，是名為四意念斷也。㊦識苦者，本為苦。為苦者，為有身。從苦為因緣，起者，所見萬物。苦習者，本為苦。從苦為因緣生。盡者，萬物皆當敗壞，為增苦習。復當為¹¹² 墮八道中，道人當念是八道，是名為四為四收¹¹³ 苦，得四神足念也。¹¹⁴

㊦㊦㊦の文はいったい誰の手によって完成されたのか。

㊦の文は、『阿毘曇五法行經』にある文と極めて類似しているし、そのうえ、㊦の「四意念斷」¹¹⁵ は安世高の訳語であるとも推論できる。

「避身」「避痛痒」「避意」「避法」の用語に関して、安世高又は他の訳經者の訳經には見当たらないとはいえ、他の訳經と比べてみたら、安世高

¹¹⁰ CBETA, T15, no. 602, p. 170b15-c19.

¹¹¹ 斂=劍[㊦]，斂[㊦]，斂[㊦]。

¹¹² [爲]—[㊦]。

¹¹³ 收=枝[㊦]。

¹¹⁴ CBETA, T15, no. 602, p. 170b15-25.

¹¹⁵ 『佛説大安般守意經』では二箇所の「四意念斷」の語が見られる。安世高の他の訳經では「四意斷」となっている。「四斷意」も見られる。竺大力、支謙、支婁迦讖の少数の訳經にも「四意斷」の語が見られるが、それは安世高の訳語を援用していると思われる。

の訳本には「避」の字が多用されている事も否めないであろう。¹¹⁶

さらに㊦の「四意止」の語は他の訳経者にも引用されているが、もとより安世高の訳語である¹¹⁷。つまり、㊦㊦㊦の文は安世高訳であると筆者は指摘したい。

『佛説大安般守意經』における五根から八行までの文、¹¹⁸ もとの「四神足」の文、¹¹⁹ および四意斷の一部¹²⁰ は「三十七品經」の本文と見なされているために、三、四、五、六、七の節では『佛説大安般守意經』『新出安般經』『數息品』における「三十七品經」に該当する箇所を改めて対照しながら考察していきたい。

（一）四意斷 cattāro sammappadhānā

『新出安般經』における「四意斷（あるいは四斷意）」に関して、次のように述べる。

四斷意爲何等？①未生弊惡意法，不復生，是爲一斷意。②已生弊惡意法，即舍，是爲二斷意。③未生清淨法，即生，是爲三斷意。

¹¹⁶ 「避」字は他の訳経者も使っているが、安世高の多数の訳経に見られる。とりわけ『佛説一切流攝守因經』に 27 箇所、『普法義經』に 4 箇所、『七処三觀經』に 11 箇所、『九横經』に 8 箇所、『佛説大安般經』に 11 箇所に見出される。

¹¹⁷ 竺大力、支謙、支婁迦讖の少数の訳経にも「四意止」の語があるが、安世高の訳経には絶対多数を占めている。また「四意止」の内容たる「自觀身觀他人身」「自觀痛痒觀他人痛痒」「自觀意觀他人意」「自觀法觀他人法」の文は、『阿含正行經』（CBETA, T2, no. 151）にも見られる。支婁迦讖訳の『般舟三昧經』（CBETA, T13, no. 418）にも見られるが、安世高の例を援用していると思われる。『阿含正行經』は『出三藏記集』に出てないものの、その用語例から安世高訳であると見られる。林屋友次郎（1938, p. 25）を参照されたい。

¹¹⁸ CBETA, T15, no. 602, p. 170b25-c19.

¹¹⁹ CBETA, T15, no. 602, p. 168c2-16.

¹²⁰ CBETA, T15, no. 602, pp. 171c28-172a2.

④已生清淨法，便增多有生，是爲四斷意。如是四意正斷，即時行滿具，是爲四斷意。¹²¹

一方「數息品」では次のようになっている。

①未起¹²² 惡法，則不復生。②諸惡自盡。③未起法念，當使興發。④所興善法，令具足成。¹²³

『新出安般經』と「數息品」における「四意斷」の四つの意断について、その対応関係をそれぞれ論じてみる。

『新出安般經』	「數息品」
①未生弊惡意法，不復生	①未起惡法，則不復生
②已生弊惡意法，即舍	②諸惡自盡
③未生清淨法，即生	③未起法念，當使興發
④已生清淨法，便增多有生	④所興善法，令具足成

『新出安般經』「數息品」には四つの「意断」が述べてあるのに対して、『佛說大安般守意經』では「善念生便惡念斷故」という「四意斷」のまとめで書き記した。そのまとめは下記のとおりである。

㉑1 不作現在罪，㉑2 但畢故罪，是為四意斷也。畢故不受新，為四意止。㉑1 故畢㉑2 新止，為¹²⁴ 四意斷。故竟新¹²⁵ 斷，為四神

¹²¹ ㊦TEXT, 159ff-163ff.

¹²² 起=趣。

¹²³ CBETA, T15, no. 606, p. 218a18-19.

¹²⁴ 為+（止為）㉑㉒㉓㉔。

¹²⁵ 竟新=意新㉑㉒，=意斷㉓㉔。

足。……四意斷。謂：◎常念道。④善念生，便惡念斷故。為斷息道¹²⁶。善念止，便惡念¹²⁷生故，為不斷也。¹²⁸

次は、『新出安般經』の内容を逐一解釈する文でないながらも、その意味を『新出安般經』「數息品」に当てはまってみると、互いの対応の関係が下表のとおりである。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』	「數息品」
① 不作現在罪 (=① 新止)	① 未生弊惡意法，不復生	① 未起惡法，則不復生
② 但畢故罪 (=② 故畢)	② 已生弊惡意法，即舍	② 諸惡自盡
④ 善念生 (便惡念斷故)	③ 未生清淨法，即生	③ 未起法念，當使興發
◎ 常念道	④ 已生清淨法，便增多有生	④ 所興善法，令具足成

小結

つまり、『佛說大安般守意經』の「① 不作現在罪② 但畢故罪」「◎ 常念道。④ 善念生便惡念斷故。」は、本文の箇所である。そしてこれらの本文に対して、「是為四意斷也。畢故不受新，為四意止」「為斷惡道。善念止，便惡念生故，為不斷也。」は、註の箇所である。

(二) 四神足 cattāro iddhipādā

四神足について

三十七道品の修習の手順によれば、修行者は四意斷（四正勤）cattāro sammappadhānā を成し遂げてから、欲定 chandasamādhi、精進定 vīriyasamādhi、心定 cittasamādhi、観定 vīmaṃsāsamādhi を加行していく。最終的に、

¹²⁶ 息道 = 惡道念 ◎ ④ ④ ④ ④。

¹²⁷ 念 + (念) ◎ ④ ④ ④ ④。

¹²⁸ CBETA, T15, no. 602, pp. 171c24-172a1.

欲定の断行を具足する神足

chandasamādhīpadhānasaṅkhārasamannāgataṃ iddhipādaṃ

精進定の断行を具足する神足

vīriyasamādhīpadhānasaṅkhārasamannāgataṃ iddhipādaṃ

心定の断行を具足する神足

cittasamādhīpadhānasaṅkhārasamannāgataṃ iddhipādaṃ

観定の断行を具足する神足

vīmaṃsāsamādhīpadhānasaṅkhārasamannāgataṃ iddhipādaṃ

が成就されるのである。いわば、四神足の成就である。

『佛說大安般守意經』に「四神足」についての説明は下記のとおりである。

㊦断生死得神足。謂：意有所念為生，無所念為死，得神足者，能飛行故。言生死當斷也。得神足有五意：一者喜，二者信，三者精進，四者定，五者通也。㊧四神足念，不盡力。得五通¹²⁹。盡力自在，向六*通。為道人四神足，得五通。盡意，可得六通。盡意。謂：萬物意不欲也。一信，二精進，三意，四定，五黠，是五事為四神足念。為力者¹³⁰，凡六事也。從信，為屬四神足念。從喜，從念，精進，從定，從黠，是為屬五根也。㊨從㊦喜定，謂信道。從㊦力定，謂精進。從㊦意定，謂意念定。從㊦施定，謂行道也。為種故，有根。有為之事，皆為惡，便生想，不能得勝。謂得禪，是因為力。亦謂：惡不能勝善意，滅復起故為力。力定者，惡意欲來，不能壞善意，故為力定也。¹³¹

129 通＝道㊦。下同。

130 者＝至㊦㊦。

131 CBETA, T15, no. 602, p. 168c2-16.

㉑ 斷生死得神足。謂：意有所念為生，無所念為死。得神足者，能飛行故，言生死當斷也。得神足有五意：一者喜，二者信，三者精進，四者定，五者通也。

この段落は「斷生死得神足」に対する解釈である。

「斷生死得神足」の語は『新出安般經』の「斷生死隨行成神足」から派生した用語でもある。「斷」は padhāna、「生死」は saṅkhāra の訳である。saṅkhāra は一般的に「行」と訳されるが、「生死」と訳するのは安世高の特有の訳語である。しかしながら、あらためて「生死」を「生」と「死」にわけて解釈することは、格義的な解釈である。

㉒ 四神足念不盡力，得五通，盡力自在，向六通。為道人四神足，得五通。盡意，可得六通。盡意謂：萬物意不欲也。一信，二精進，三意，四定，五黠，是五事，為四神足念。為力者，凡六事也。從信，為屬四神足念。從喜，從念，精進，從定，從黠，是為屬五根也。

「四神足念」に対する解釈文である。

文中に「五通」「六通」との関わりについて二回も註釈する。「六事」とは「信、喜、念、精進、定、黠」の六つのことを指す。

㉓ 從喜定，謂信道。從力定，謂精進。從意定，謂意念定。從施定，謂行道也。為種故，有根。有為之事，皆為惡。便生想不能得勝，謂：得禪是因為力。亦謂：惡不能勝善意。滅復起故為力。力定者，惡意欲來，不能壞善意，故為力定也。

この段は「喜定」「力定」「意定」「施定」に対する解釈であるし、更に五根の「根」および「力」「力定」について新たに註釈をする。

『新出安般經』における「四神足」の説明は次に述べている。

①彼如應欲得，②是名爲欲。③從是欲，所生念一心，④是名爲定。⑤彼如是應行，相連不中止，⑥有信，有精進，有念，有定，有慧，⑦是名爲斷生死。⑧故説：欲定斷生死，隨行成神足。⑨彼如是應行，⑩身者，意者能攝，⑪是名爲精進。⑫從是精進，所起意念一心，是名爲定。彼如是相連，不中止斷，若欲，若信，若念，若定，若慧，是爲斷苦生死根。故説：精進定斷生死，有神足行。⑬彼如是應行，若意，若心¹³²，若識，⑭是名爲意。⑮所生念一心，是名爲定。彼如應諦行，常不離，若欲，若信，若精進，若念，若定，若慧，是名爲斷生死。如是有應隨，故言意定斷生死，有應行成神足行。⑯彼如有可遍諦，⑰是名爲思惟。⑱所起念一心，是名爲定。彼如有常斷，若欲，若信，若精進，若念，若定，若慧，是名爲斷生死。故曰念定，斷生死苦，隨行成神足滿。如是是四神足，是時行俱行，彼若⑲能定，若⑳精進定，若意定¹³³，若思惟定，是名爲定根。佛説如是，欲見定根，當見在四棄中。如是是四棄，是時行俱行。¹³⁴

『新出安般經』に記述する「四神足」、いわゆる「欲定斷生死隨行成神足」「精進定斷生死有神足（行）」「意定斷生死有應行成神足（行）」「念定斷生死苦隨行成神足（滿）」についての訳語は、同じく安世高訳の『陰持入經』に見られる「四神足」¹³⁵である「欲定斷生死隨行增神足」「精進定斷生死隨行增神足」「意定斷生死隨行增神足」「戒¹³⁶（誠）定斷生死隨行

132 心=止㊸。

133 [定]—㊸。

134 ㊸TEXT, 164ff-184ff.

135 CBETA, T15, no. 603, p. 174a18-26.

136 『增壹阿含經』の「四神足」の文（CBETA, T2, p. 658a6-8）には「誠=戒」という註があり、さらに『修行本起經』の「四神足」の文（CBETA, T3, no. 184, p. 471b24-26）にも戒=慧という註がある。したがって、この戒は誠にすべき、慧または觀の意味を取るべきである。

増神足」とはほぼ合致している。

「隨行成」「隨行増」の原語は samannāgata で、「具足」「成就」を意味している。saṅkhāra を「生死」と訳すという安世高特有の訳風に対して、玄奘¹³⁷ は「欲三摩地斷行成就神足」「勤三摩地斷行成就神足」「心三摩地斷行成就神足」「觀三摩地斷行成就神足」に訳した。

「數息品」における「四神足」の説明は次の文である。

㉔心*已如足¹³⁸ 隨其所欲，㉕是謂自恣；㉖令志專一，㉗是謂自在定意。㉘從是次第、㉙信、念、精進、觀察護命，㉚是謂為信。思惟其行，㉛是謂自恣三昧；專精于道而獲神足。㉜假使修行，㉝身、口、心強，㉞是謂精進㉟定意之法。㊱志專心識，㊲是謂意㉞定。㊳欲入道義，㊴是謂察誠¹³⁹ ㊵定意。以是之緣，致四神足。已獲神¹⁴⁰ 足，是謂信根。¹⁴¹

『佛說大安般守意經』には「斷生死得神足」の語が出ているのに対して、『新出安般經』は「斷生死隨行成神足」の用語を使っている。「數息品」にそれに該当する記述は見当たらないが、「斷生死」は「斷行」の意味で「勤行」「勝行」の意味も有するという説があるから、竺法護は「專精于道」と訳したに違いない。

四神足における「四定」について『新出安般經』「數息品」の両經にある対応を以下のように示す。

137 『聲聞地』。CBETA, T30, no. 1579, p. 440a3-5.

138 足=是。

139 誠=戒。

140 (四) + 神。

141 CBETA, T15, no. 606, p. 218a19-25.

A <<欲定>>

『新出安般經』	「數息品」
①如應欲得	㉑「心已如是隨其所欲
②是名爲欲	㉒是謂自恣
③從是欲，所生念一心	㉓令志專一
④是名爲定	㉔是謂自在定意
⑤彼如是應行相連不中止	㉕從是次第
⑥有信、有精進、有念、有定、有慧	㉖信、念、精進、觀察護命
⑦名爲斷生死	㉗是謂為信，思惟其行
⑧故說欲定斷生死，隨行成神足	㉘是謂自恣三昧，專精于道而獲神足

上述の「數息品」の㉗は『新出安般經』の⑦と相違するが、「數息品」での「信」は『新出安般經』の「断生死（行）」の力より生じる信である。また、「數息品」にある<<欲定>>の説明は『新出安般經』の文とほぼ対応している。

B <<精進定>>

『新出安般經』	「數息品」
⑨彼如是應行	㉙假使修行
⑩身者意者能攝	㉚身口心強
⑪是名爲精進	㉛是謂精進
⑫從是精進，所起意念一心，是名爲定	㉜定意（之法）

<<精進定>>への見解に関しては、『新出安般經』の⑨⑩⑪⑫は「數息品」の㉙㉚㉛㉜とほぼ対応しているし、<<欲定>>の⑤⑥⑦⑧とも同条目を掲げているが、「數息品」には該当の箇所は見当たらない。というのは、本来なら「數息品」にあったはずの⑤⑥⑦⑧の文が略され、後日になって『新出安般經』はそれらを収録したからである。下に述べる<<意定>><<念定>>にも⑤⑥⑦⑧と同様な文が持っている。

C 《意定》

『新出安般經』	「數息品」
⑬彼如是應行，若意、若心、若識	㉓志專心、識
⑭是名爲意	㉑是謂意
⑮所生念一心，是名爲定	㉒定

D 《念定》

『新出安般經』	「數息品」
⑯彼如有可遍諦	㉑欲入道義
⑰是名爲思惟	㉒是謂察誠
⑱所起念一心。是名爲定	㉓定意

四神足における四種定との対応によると、『新出安般經』における「四神足」の記述は「數息品」の出自を引用し、さらに敷衍してきたものである。

四神足定にある主な用語において、『佛說大安般守意經』『新出安般經』『數息品』の三者にある対応関係は下表のとおりである。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』	「數息品」
㊦喜定謂信道	→㉑能定（欲定）	→念定（思惟定）
㊧力定謂精進	→㉒精進定	→㉑精進㉒定意
㊨意定謂意念定	→意定	→㉑意㉒定
㊩施定謂行道	→念定（思惟定）	→㉑察誠 ¹⁴² ㉒定意

『佛說大安般守意經』の㊩「施定」は理解しがたいが、「施」は、恐ら

142 竺法護訳經には多くの場合に「察」の一字が「觀察」と意味し、さらに「誠」が「戒」に通ずる例があるから、「察誠」は「悪を断じ、善を修する」の意味と当てはまる。『佛說海龍王經』：「專察妙法」（CBETA, T15, no. 598, p. 146b27）『佛說無言童子經』：「察於禁戒」（CBETA, T13, no. 401, p. 528c16）。また、安世高訳『陰持入經』は、「四神足」の第四番の「神足」を「戒定」と使う。

く「思」の誤写であろう。というのは、漢語の「思」は「施」の発音に非常に近いわけである。思は思惟の意味で觀の意味と同定できるのである。あるいは「施定」は、捨定と同義語とも考えられる。¹⁴³「四神足」が「信」とどんな関わりをもっているか、パーリ三藏は殆ど触れられていないが、『声聞地』¹⁴⁴には以下のように述べている。

- (1) chanda-samādhi-prahāṇa-saṃskāra-samanvāgatasya ṛddhipādasya
- (2) Śraddhā-vīrya-citta-mīmāṃsā-samādhi-prahāṇa-saṃskāra-samanvāgatasya
ṛddhipādasya
- (3) vīrya-citta-mīmāṃsā-samādhi-pradhāṇa-saṃskāra-samanvāgatasya
ṛddhipādasya

上記の文は玄奘が次のように訳している。

四神足者。一欲三摩地，斷行成就神足。二勤三摩地，斷行成就神足。三心三摩地，斷行成就神足。四觀三摩地，斷行成就神足。¹⁴⁵

梵文、漢訳の両文を照らし合わせてみたところ、玄奘の訳は梵文の(1)行目と(3)行目にあたっているとわかる。要するに、玄奘は(2)行目を訳していないこともうかがえる。また、(2)行目の śraddhā (信) の以下の文は(3)行目の文と殆ど一致して、しかも、それなりの意味も含め、この複合語は格限定複合語(狭義の Tatpuruṣa)である一方、śraddhā と vīrya..... は具格(instrument)の関係をもっている。

¹⁴³ この「施定」は確かに理解し難い訳語である。ŚrBh.の該当する語は mīmāṃsā であり、觀察の意味で、玄奘はこれを「觀」と訳している。本論の六では安世高が upekkhā を「觀」に訳している例がある。upekkhā は普段「捨」に漢訳されている。漢訳語として安世高は「觀」「捨」と同定している可能性があると考えられる。さらに「施」は「捨」と同意味であることから、安世高は mīmāṃsā を「施」に訳している可能性もある。

¹⁴⁴ ŚrBh., p. 290, 13ff-17ff.

¹⁴⁵ CBETA, T30, no. 1579, p. 440a2-5.

これを訳せば、「信による精進、心、観察の三摩地勝行成就の神足」になる。修習の結果からみると、下位の「欲三摩地斷行成就神足」に対して「勤、心、觀三摩地斷行成就神足」は上位に位置づけることになる。

「欲三摩地斷行成就神足」を成就したら、直ちに「勤、心、觀の三つの三摩地斷行成就神足」まで成就されるわけではないが、「勤、心、觀の三つ」が必ず成就できるという「信心」は付けてくるはずである。

要するに、『佛說大安般守意經』の「從信為屬四神足念」、「數息品」の「從是次第信念精進觀察護命。是謂為信」および、『新出安般經』の「彼如是應行，相連不中止，有信，有精進，有念，有定，有慧，是名為斷生死。」は、上述の ŚrBh.の二行目の文に該当している。それ故、次の『佛說大安般守意經』における「四神足」の文はオリジナルテキストからきたものと判定できる。

從信，為屬四神足念。從喜，從念，精進，從定，從黠，是為屬五根也。從喜定，謂信道。從力定，謂精進。從意定，謂意念定。從施定，謂行道也。¹⁴⁶

小結

『佛說大安般守意經』の「喜定…力定…意定…施定」は、本文の箇所である。そしてそれらの本文の箇所に対して、「謂信道…謂精進…謂意念定…謂行道也」は、註の箇所である。

また、『佛說大安般守意經』における「四神足」の文は、一見「三十七品經」とはなんらかの関わりを持っていないようであるが、キーワードである「斷生死得神足」および四つの定の名称によると、『新出安般經』と類似するように思われる。

『新出安般經』の阿毘達磨のような繰り返しの文は、『佛說大安般守意

¹⁴⁶ CBETA, T15, no. 602, p. 168c10-13.

經』では殆ど見出されない。これは、『新出安般經』を敷衍するときに安世高が意図的に煩瑣な部分を省略し、さらに「神通」「飛行」の解釈を加えたからである。

また、「數息品」の「四神足」の文は、『新出安般經』と極めて類似することからみると、両經にはかなり密接な関係をもっていると結論づけては合理的であろう。

四、「三十七品經」の「五根」

『新出安般經』の「彼如有諦」並びに『佛説大安般守意經』の「從諦」の関係について既に二で論究したため、次は五根をはじめ八行までの内容を新たに探してみたい。

五根 pañcīndriyāni

『佛説大安般守意經』における「五根」は次のようである。

㉑信佛意喜，是名為信根，為自守行法。㉒從諦，身意受，是名能根，為精進。㉓從諦，念遂諦，是名識¹⁴⁷根，為守意¹⁴⁸。（從諦一意），㉔從諦，一意止，是名定根，為正意。㉕從諦，觀諦，是名黠根，為道意，是名為五根也。¹⁴⁹

上述した「從諦，一意。從諦，一意止」の「從諦一意」は、重複している文である。

「㉑信佛，意喜。是名為信根。……㉒從諦，身意受，是名能根。……㉓從諦，念遂諦，是名識根。……（從諦一意），㉔從諦，一意止，是名定根。……㉕從諦，觀諦，是名黠根。……是名為五根也」という本文に対して、

¹⁴⁷ 識＝諦 ㊦ ㊧ ㊨ ㊩。

¹⁴⁸ 意＋（名） ㊦ ㊧ ㊨ ㊩。

¹⁴⁹ CBETA, T15, no. 602, p. 170b25-29.

「為自守行法……為精進。……為守意……為正意……為道意」の文は①②③④⑤と対応し、解釈をする文である。

次に述べての「五力」「七覺意」「八行」は前述した五根と同じように、各道品の本文の後に註釈を付けている。

なぜ「本文」と「註」とに両分できるかということ、『新出安般經』と「數息品」の形式によれば、信根、精進根などが一つの切り目であり、その後には他の文を付けていないからである。『佛說大安般守意經』において、二分によってされた「本文」のあとに「註解」はついてくる。この「註解」は、安世高自身の口述した解釈であると考えてはよかろう。その理由は次のように四つに分けている。

<理由 1> 『佛說大安般守意經』の全文には、整った「本文」であるパラグラフ（段落）が一つさえも存在していない。安世高の弟子だった嚴佛調の話によると、訳經を敷衍する際に、安世高は「口解」¹⁵⁰と「文傳」を主にするという。

「口解」とは、原本を拠り所に口述によって解釈するものであるゆえに、『佛說大安般守意經』は、安世高の口述によって成り立つものであると考えられる。

<理由 2> 「三十七品經」の各「道品」自体は、一文字または二文字の単語の形ではなく、短文になっている。短文の後には註解が付いてくる。これらの文を解釈する能力は安世高自身しか持っていないと考えられる。

<理由 3> 解釈の手法といえは、安世高以外に誰かの「註」だとすれば、『陰持入經註』のような註が存在するかもしれないが、実は『陰持入經』の註の形式は、「三十七品經」の文に全く見付からない。

<理由 4> ③「念遂諦，是名識根，為守意」の「守意」は、一見格義的な用語のようなものであるが、『佛說大安般守意經』における「守意」の語はもともと sati (smṛti) から訳された語である。しかも安世高の訳經には「守意」の意味に近いパーリの原語も存在している。

¹⁵⁰ 『沙彌十慧章句序』「或以口解。或以文傳。」CBETA, T55, no. 2145, p. 69c28.

次に、「十報法經」にでた短文を示す。

『長阿含十報法經』「五為道法，守意者。不守意者，無有道法。」¹⁵¹

「十報法經」の異訳たる『長阿含經・十上經』では該当する文が次のとおりである。

『長阿含經』「道當專念，多忘非道。」¹⁵²

さらに上述した二つの漢訳に該当するパーリ文も見出される。

Upaṭṭhitasatissa ayaṃ dhammo, nāyaṃ dhammo muṭṭha-ssatissa.¹⁵³
 (これは念現前の法であり、これは失念の法ではない。)

パーリ語、安世高の訳語、佛陀耶舎共竺佛念の訳語について、下表のとおりに対照してみる。

パーリ語 (私訳)	安世高訳	佛陀耶舎共竺佛念訳
upaṭṭhitasati (念現前)	守意	專念
muṭṭhassati (失念)	不守意	多忘
dhamma (法)	道法	道

上に述べたように安世高訳に「守意」の用語が使用されているから、『佛説大安般守意經』の◎「守意」は、『新出安般經』の③「意生不忘諦。是名爲念根」の「意生不忘」と対応している。

『新出安般經』における五根の文は次のごとくである。

151 CBETA, T1, no. 13, p. 238b8.

152 CBETA, T1, no. 13, p. 55c24-25.

153 DNIII, p. 287, 21ff-22ff.

『陰持入經』では pasāda（淨信）は「可喜」¹⁵⁴と訳されるから、『新出安般經』における五根の「可念可可」の「可」は「信」の意味を持っていると考えられている。

彼如有諦，①信。信者，不離信意生。是生意，能得隨分別可，念可，可，是名爲信根。彼如有諦，②身亦念攝持，是名爲精進根。彼如有諦，③意生不忘諦，是名爲念根。彼如有諦，④一心向行，是名爲定¹⁵⁵ 根。彼如有諦，⑤觀，是名爲惠根。如是五根，在時行俱行。¹⁵⁶

「數息品」における五根は次のごとくである。

㊀已獲神¹⁵⁷ 足，是謂信根；㊁身心堅固，謂精進根；㊂所可思法，是為意根；㊃其心專一，是謂定根；㊄能分別法而知所趣，是謂智慧根；以是之故具足五根。¹⁵⁸

『佛說大安般守意經』『新出安般經』「數息品」における「信根」に対する解釈は、やや異なっている。ここでは新たに「信」について考察してみる。

『陰持入經』では、仏法僧と四諦を信じないことは疑蓋と呼ばれている。信根を成就したときは、仏法僧と四諦が不退になるとされる。

Tattha katamaṃ vicikicchānīvaraṇaṃ? Yo buddhe vā dhamme vā saṅghe vā ...pe...ayaṃ vicikicchā. ¹⁵⁹

¹⁵⁴ pasādattho indriyattho (Peṭakopadesa, p. 115, 2ff-3ff). 「可喜爲根義」 CBETA, T15, no. 603, p. 174a30.

¹⁵⁵ 定 = 定定^㊂。

¹⁵⁶ 安TEXT, 185ff-191ff.

¹⁵⁷ (四) + 神。

¹⁵⁸ CBETA, T15, no. 606, p. 218a25-28.

彼疑蓋為何等？若不¹⁶⁰ 信佛，不信法，不信行者聚。¹⁶¹ 不解苦，習，盡，道。比結使亦從發，是名為疑蓋。¹⁶²

『修行道地經』の「數息品」は次のように述べている。

曾所篤信佛、法、聖眾，苦、習、盡、道，永不復信。當習于定而反捨之，當觀不觀精進更懈，本所思法¹⁶³ 永不復起¹⁶⁴，以是之故從其頂法而退墮落。何謂頂法而不退還？如曾所信日信增益，如本定心遂令不動，所觀弗失，常察精進轉增于前，所思念法專精不捨，以是之故不退¹⁶⁵ 頂法。¹⁶⁶

文中の定心は四神足定のことを指すことである。

頂法の不退に達するために、四神足を修しなければならない。頂法的不退を成し遂げたと同時に、仏法僧並びに四諦に対する信は不退の境地に達するという。

『佛説大安般守意經』の「信仏」とは、「仏法僧と四諦とを信じること」を意味する。『佛説大安般守意經』『新出安般經』「數息品」では、「信根」に対する解釈がほぼ同趣旨であると考えられている。というのは、『佛説大安般守意經』よりも『新出安般經』の「信根」の方は難解なため、安世高は「信根」を解釈するとき、改めてより簡略な文に変更し「信仏意喜」になったのである。

159 Paṭakopadesa, p. 137, 20ff-21ff.

160 不+ (能) ㊦。

161 聚 = 眾 ㊦㊧㊨。

162 CBETA, T15, no. 603, p. 180a29-b2.

163 思法 = 忍法 ㊦。

164 起 = 念 ㊦㊧。

165 不退 = 不失 ㊦㊧。

166 CBETA, T15, no. 606, p. 217c10-16.

五根中の信根はすでに論じた以上、下表では『佛說大安般守意經』『新出安般經』『數息品』における四つの根の趣旨を中心に、その対応関係を示す。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』	「數息品」
㊦身意受，是名能根	㊦身亦念攝持，是名為精進根	㊦身心堅固，謂精進根
㊧念遂諦，是名識根	㊧意生不忘諦，是名為念根	㊧所可思法，是為意根
㊨一意止，是名定根	㊨一心向行，是名為定根	㊨其心專一，是謂定根
㊩觀諦，是名點根	㊩觀，是名為慧根	㊩能分別法而知所趣，是謂智慧根

「定根」の文中に出る「一意」と「一心向」の原語は ekaggam cittassa だと推定できる。『陰持入經』では「一向念」と訳される。

小結

『佛說大安般守意經』の「㊦信佛意喜，是名為信根」「㊦從諦，身意受，是名能根」「㊧從諦，念遂諦，是名識根」「㊨從諦，一意止，是名定根」「㊩從諦，觀諦，是名點根」は、本文の箇所である。そしてそれらの本文の箇所に対して、「為自守行法」「為精進」「為守意」「為正意」「為道意」は、註の箇所である。

『佛說大安般守意經』の「五根」の趣旨はほぼ『新出安般經』と対応している。同一概念における複数の用語が生じるような実状は、おそらく訳経時代の最初期に、訳語は未だ定着していなかったに違いない。さらに、「數息品」の「五根」の定義は上述の両經と極めて類似すると考えられている。

五、結論

以上、「六事の淨」すなわち「三十七品經」の四意止からないし「五根」のそれぞれの部分を検討した結果、『佛說大安般守意經』『新出安般經』『數息品』という三つのテキストの関わり合いについて再考察を試みて

みると、三者は緊密した繋がりを持っているように思われる。

『新出安般經』の阿毘達磨のような繰り返しの文は、『佛説大安般守意經』では殆ど見出されない。これは、『新出安般經』を敷衍するときに安世高が意図的に煩瑣な部分を省略し、当時に適応する解釈を加えたからである。これは、「四神足」などの段にも見られる。また、定型句の「如（應）有諦」から「從諦」へと変換することも省略的な手法であると思われる。

『佛説大安般守意經』と『新出安般經』において、対応する同一概念に複数の用語が生じるような実状については、おそらく訳経時代の最初期に、訳語は未だ定着していなかったに違いない。あるいは、前者の「口解」による口語が同義語を作り出す原因となる。

『佛説大安般守意經』における「本文」と『新出安般經』を見比べれば、ある部分の意味がほぼ同じに見られるが、それらの用語自体が異なることは、

『佛説大安般守意經』と『新出安般經』との間には中間型『安般經』が確かに存在すると推定できる。

【略語】

本論文では主要テキスト・参考文献の版本に関する略語の説明は次の通りである。

1. Original works

（略語） （書名、訳者・編集者、出版等）

AkBh. = *Abhidharmakośabhaṣya of Vasubandhu*, ed. P. Pradhan, K. P. Jayaswal
Research Institute, Patna, 1967. (TSWS8)

ŚrBh. = *ŚrAvakabhUmi of ĀcArya AsaGga*, ed. Karunesha Shukla, K. P. Jayaswal
Research Institute, Patna, 1973. (TSWS14)

2. Original works published by The Pali Text Society (PTS)

DNIII = *Dīgha-nikāya*（長部經典）, Vol III, 1992.

Peṭakopadesa = *Peṭakopadesa*（1982）

PSSB = 『Peṭakopadesa』の第六章「Suttatthasamuccayabhūmi 經義集の地」

3. Periodicals, Serial Works and other Abbreviations

印仏研=印度學佛教學研究

PTS = The Pali Text Society, London.

T= 『大正藏』 = 大正新修大藏經（Taishō Shinshu Daizōkyō, Buddhist Tripiṭaka
in Chinese）

金 = 『金藏』 = 趙城金藏（1139-1173）

麗 = 『高麗藏』（1236-1250）

宮 = 『宮本』 = 宋・毘盧藏（1113-1172 又は 1104-1148, 宮内庁書陵部所蔵本）

宋 = 『宋本』 『元本』 『明本』

資 = 『宋本』 = 宋・資福藏（1239, 増上寺所蔵本）

元 = 『元本』 = 元・普寧藏（1277-1290 又は 1209-1286, 増上寺所蔵本）

明 = 『明本』 = 永樂北藏（1410-1440）

磧 = 『磧砂藏』（1231-1322 又は 1225-1350）

南 = 『南藏』 = 大明南藏（1412-1417, 山東省濟南図書館所蔵本）

㊦ = 『嘉興藏』 = 徑山藏（1589-1676, 駒澤大学所蔵本）

新發見金剛寺本安世高訳『安般守意經』 『佛説十二門經』 『佛説解十二門經』

= 『金剛寺一切經の基礎的研究と新出佛典の研究』

（= 落合俊典, 2004 = 『報告書』）中公開的寫本影印

門TEXT = 金剛寺新發見『佛説十二門經』写本（影印）

解TEXT = 金剛寺新發見『佛説解十二門經』写本（影印）

安TEXT = 金剛寺新發見『安般守意經』写本（影印）

= 『新出安般經』 = 善本=A 本

㊧ = 金剛寺新發見『安般守意經』写本（影印）=B 本

4. Database

CBETA = Chinese Electronic Tripitaka Collection, version 2008.

引用文獻

佛教藏經或原典文獻

- 『長阿含經・十上經』。T1, no. 1。
『長阿含十報法經』。T1, no. 13。
『佛說一切流攝守因經』。T1, no. 31。
『普法義經』。T1, no. 98。
『雜阿含經』。T2, no. 99。
『增壹阿含經』。T2, no. 125。
『七處三觀經』。T2, no. 150A。
『九橫經』。T2, no. 150B。
『阿含正行經』。T2, no. 151。
『佛說無言童子經』。T13, no. 401。
『般舟三昧經』。T13, no. 418。
『佛說大安般守意經』。T15, no. 602。
『陰持入經』。T15, no. 603。
『修行道地經』。T15, no. 606。
『阿毘達磨大毘婆沙論』。T27, no. 1545。
『舍利弗阿毘曇論』。T28, no. 1548。
『阿毘曇五法行經』。T28, no. 1557。
『瑜伽師地論・聲聞地』。T30, no. 1579。
『出三藏記集』。T55, no. 2145。

中日文專書、論文或網路資源等

- デアヌ フロリン (2004)。『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』。東京：国際仏教学大学院大学。
- 宇井伯壽 (1983)。『譯經史研究』。東京：岩波書店。(1971 初版)
- 林屋友次郎 (1938)。「安世高訳の雜阿含と增一阿含」。『佛教研究』1-1, pp. 23-25。
- 釋果暉 (2008)。「『佛說大安般守意經』における「本文」と「註」の解明」。『法鼓佛學學報』3, pp. 45-49。

西文專書、論文或網路資源等

- Hung, Hunglung. 2008. "The Textual Formation of the Newly Discovered *An Ban Shou Yi Jing* ." *The Chung-Hwa Buddhist Journal*. Vol 21, pp. 123-143.
- Stefano, Zacchetti. 2004. "On Jingfa 經法 in Early Chinese Buddhist Translations." *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2003*. No. 7, pp. 159-166.

『佛說大安般守意經』之「經文」與「註」的解明（二）

——從「淨」到「五根」

釋果暉

法鼓佛教學院助理教授

摘要

筆者在第三期的法鼓佛學學報中，對《佛說大安般守意經》、「新發現安般經」之兩經內容以「安般之六事」為核心，逐一比對了兩經之「數」、「隨」、「止」、「觀」、「還」各個段落之對應關係，而判別「本文」與「註」，也就是《佛說大安般守意經》內容與「新發現安般經」的詞語或意義相對應的部份，視為《佛說大安般守意經》的原始本文，對此「本文」之解釋則為「註解」。

本篇論文則繼續探討兩經對「安般之六事」最後一事，也就是「淨」部份之比對，這包括了「四意止」即所謂的四念處、「四意斷」即所謂的四正勤、「四神足」、「五根」、「五力」、「七覺意」即七菩提分、「八行」即八正道、「止觀」、「四諦」及「四解依」即四無礙辯的部份，則留在以後繼續研究。

而我們也發現原來在「新發現安般經」中，「四神足」是較繁瑣而重複出現的部份，這在《佛說大安般守意經》都看不到了，也就是被省略掉了，而被加進了「神通」「飛行」的解釋。可以推斷是安世高將此故意將此高階而難解的修行概念省略之故。

在較難解的詞句或概念，在相對應的《佛說大安般守意經》的內容之中，都變成較簡短或簡明易瞭解了，定型句接頭詞的「如（應）有諦」變為「從諦」。解釋「信根」的「隨分別可念可可」，也變為容易了解的「信佛意喜」。

從「新發現安般經」的「如（應）有諦」變為《佛說大安般守意經》的

「從諦」，我們相信「如有（yathābhūtaṃ）兩字一定被省略了，也可推斷在「新發現安般經」與《佛說大安般守意經》之間有過渡型之「中間型安般經」之存在。

關鍵詞：安世高、經與註、淨、陰持入經、中間型安般經

Distinguishing Text from Annotations in “*Foshou Da Anban Shouyi Jing* T602” (Part Two)

Shi Guo-huei
Assistant Professor
Dharma Drum Buddhist College

Abstract

In the third issue of the Dharma Drum Buddhist Journal, I have compared the contents of “*Foshou da anban shouyi jing*” and “The Newly Discovered *Anban shouyi jing*” by focusing on “the six stages of breathing.”

After comparing the corresponding paragraphs that address the issues of “counting,” “following,” “fixing,” “contemplating” and “turning” in these two sutras, we are able to distinguish the (original) “text” components from the (later) “annotations,” i.e. we can treat the corresponding parts of “*Foshou da anban shouyi jing*” and “The Newly Discovered *Anban shouyi jing*” as the original parts and treat the rest—those parts that do not correspond as “annotations”.

This paper continues to look into the final stage of “the six stages of breathing” in these two sutras, i.e. to compare the corresponding part for “purifying,” which comprises the parts for the “Four Bases of Mindfulness” (i.e. the so-called Four Arousings of Mindfulness), “Four Efforts to enlightenment,” “Four Occult Powers,” “Five Roots of Goodness.” As for the “Five Powers,” “Seven Factors of Enlightenment,” “Eightfold Noble Path,” “Calm Abiding and Special Insight,” “Four Noble Truths” and “Four abilities of unhindered understanding and expression,” I will investigate these topics in future research.

We have found that in “The Newly Discovered *Anban shouyi jing*,” the “Four Occult Powers” is the more complicated and repetitive part, but this subject is nowhere to be seen in “*Foshou da anban shouyi jing*.” It has been omitted and replaced by explanations such as “magic power” and “flying.” It can be surmised that An Shigao intentionally omitted these advanced-stage and unfathomable concepts for cultivation and practice.

Regarding difficult terms and concepts that existed in the corresponding contents in “*Foshou da anban shouyi jing*,” they have all been turned into shorter or easier to understand terms, and the connecting words (prefix) of the fixed pattern sentence “ru (ying) you di 如(應)有諦” (“if one truly understands the four

truths) has been changed to “cong di 從諦” (following the four truths). The term “sui fen bie ke nian ke ke 隨分別可念可可” (following the discriminated faith, the faith of mindfulness, and the faith) was used to explain “xin gen 信根” (the faculty of faith), which has been changed to the easier to understand term of “xin fo yi xi 信佛意喜” (gaining pure happiness from believing in Buddha).

Based on the differences seen in “The Newly Discovered Anban Shouyi Jing” and “Foshou da anban shouyi jing,” I believe that there is an omission of the two words: “如有(yathābhūtaṃ), if one has” in the transition from “The Newly Discovered Anban Shouyi Jing” to “Foshou da anban shouyi jing.” Thus I conclude that there is a transitional text existent for “Anban shouyi jing” which will be termed as the “Transitional Anban shouyi jing.”

Keyword: An Shigao; text and annotation; purifying; “Transitional Anban shouyi jing”